



CAETS/NTVA セミナー "Global Energy Foresight" 出席報告

秋山 守 / MAMORU AKIYAMA

2004年5月26日(水)、27日(木)の2日間、ノルウェー工学アカデミー(NTVA: Norges Tekniske Vitenskaps Akademi)の主催・国際工学アカデミー連合(CAETS)の協力による国際セミナー "Global Energy Foresight" が、ノルウェーのスタバンガー・フォーラム会議センターで開催され、(社)日本工学アカデミーから中原副会長、山田専務理事、および秋山の3名が出席した。

ノルウェーは、北海油田の開発を契機に石油供給国の仲間入りをし、現在では石油の輸出量で見るとサウジアラビア、ロシアに次ぐ世界第3位の地位を占めるに至っている。しかし、自国権益の及ぶ残存確認埋蔵量は可採年数約10年と見なされ、遠からず減産・衰退を余儀なくされることが懸念されている。

多分にこの事情も背景に、NTVAはエネルギー・環境問題に強い関心を寄せるところとなり、今回は1998年(Do We Understand Global Climate Change?)、2001年(Future Energy-Resources, Distribution and Use)に次ぐ第3回のセミナーであり、参加者は21ヶ国と3国際機関から合計で80名を上回る盛会であった。

会議は Steensnæs ノルウェー石油・エネルギー

一大臣の開会講演に始まり、その日は炭化水素、石炭、再生エネルギー、原子力、水素などエネルギー資源別の観点と、二酸化炭素の回収のテーマも加えて、現状と技術的な将来見通しを軸とする講演が行われた。まず大臣の講演では上述の石油輸出実績に加えて、天然ガスでも欧州マーケットではロシアに次いで2位であり、さらに2006年からは米国への LNG 輸出が始まることも紹介された。そして、ノルウェー大陸棚資源のみに依存するのではなく、今後は石油・ガス産業の国際化を政府として強力に支援する旨も示唆された。続く、Doucet 世界エネルギー協議会事務総長の基調講演 "Drivers of the Energy Scene-Analysis of Past Trends and Challenges for the Future" は、エネルギーの原動力を国民総生産、エネルギー需要、エネルギー供給の3群に大別し、3元図の中で極めて体系的かつ明快に分析して見せた。

続く資源別での各講演も、それぞれに最新の情報と今後の展望、そして示唆を含む有益な内容であったと思う。また、ノルウェーで実施中の、二酸化炭素を海底に貯留する世界初のプロジェクトの解説映像も紹介された。

翌日は、中国、インド、日本、韓国、米国、



秋山 守 会員



パネル討論風景

EUなど、国や地域ごとに、技術開発への取り組みと将来のエネルギー需給展望が紹介され、最後に講演者をメンバーとするパネル討論が行われた。日本の紹介では、日本工学アカデミーや日本学術会議での活動状況、将来の発展に向けたエネルギー・環境関連の情報基盤の整備への呼びかけ、なども含めてお話しをした。パネル討論は各国工学アカデミーの立場からの認識の共有の促進、協力体制の強化、広く社会の輪

の中での将来展望などが取り上げられるかと期待したが、座長の関心が石油の資源量・価格・代替策の個別議論などに偏り、議論は戦略的な次元に至るには及ばなかった。

なお、本題ではないが、初日の夕食懇親会では豪州工学アカデミーのグループに加わり、隣席の Zillman 会長（次期CAETS会長）や若い会員達と歓談できたことを付記して、以上ご報告と致します。



CAETS Council Meeting (年次総会) 報告

専務理事 山田 郁夫 / IKUO YAMADA

2004年5月26日から28日、ノルウェーのスタバンガーで開催された国際工学アカデミー連合の年次総会に出席したので、その概要を報告する。会場は北海油田が発見された後、その基地として発展した港町の Stavanger Forum Conference Centre で開催された。参加アカデミーは20カ国、欠席アカデミーは4カ国、オブザーバ参加国はドイツと南アフリカの2カ国、参加者はCAETS事務局を含めて総勢88名であった。なお、ウクライナとスロベニアは会費未納で休眠状態となっている。



左からSalmon事務局長、Bjørlykke会長、Zillman次期会長、Wulf前会長

総会審議及び結果概要

ノルウェーの Bjørlykke 会長（2004年のCAETS会長）の司会、CAETSのSalmon事務局長の説明で事前配布議案集記載の3項目が審議され、異議なく承認された。

(1) 2003年総会（米国）議事録の承認

(2) Board Membership (2005) と Rotation Schedule の承認。日本は2007年の第17回大会の開催を約束している。日本は2006年1月1日から President-Elect、2007年は President、

2008年は Past-president を引き受けることになる。

(3) 2005年度会費と予算ならびに監査報告を承認。

(4) 現在各国均等に \$ 3,000負担しているが、今後の活動をさらに活発にするために、金額の多寡で権利とか、サービスとか、義務とかが異なるものではなく、今までと同様、すべて平等であるが、TAXのように負担できる国には負担してもらうということで、\$ 6,000、\$ 4,000、\$ 1,000の3階層案が提案された。さらに1年程度時間をかけて、各国から意見を出すことになった。

(5) Future Engineering Challenges

日本はロボットを担当したが、エネルギー・環境・交通など16のテーマについて各国の原稿が出揃い、米国の高校の先生が高校生にわかりやすい文章にリライトして出版する。

(6) 各国の国際会議開催案内、活動状況報告

10月開催予定の国際シンポジウム「ロボットとの共生」をPRした。



Seminar "Global Energy Foresight"

年次総会に先立ち開催されたセミナーに出席したので、併わせて報告する。

1968年北海油田が発見され、ノルウェーにとっては最高のクリスマスプレゼントと当時話題になり、その後石油開発関連の企業がこのスタバンガーを基地に発展した。この地で開催された意味はここにあったようである。日本からは(財)エネルギー総合工学研究所理事長の秋山会員が「Japan's Energy Supply and Demand Prospect and Energy and Environmental Technology Development」との表題で、日本のエネルギー需給展望と技術開発について、豊富なわかり易

いデータを使って講演され、閉会挨拶の中で司会者から特に秋山会員のデータ提供に感謝の言葉が述べられた。石油価格\$40が世界にどんな影響を与えるか、中国・インドの急成長が世界のエネルギー問題にどんな影響を与えるかが会議の関心事になっていた。



NEWS

中国工程院創立10周年記念式典

会長 西澤 潤一 / JUNICHI NISHIZAWA

6月2日より4日迄北京において中国工程院第7回大会と中国工程院活動十年を記念して大々的な催しが行われた。海外から71名、日本からは藤嶋昭会員と私の二人だったが、会自体は甚だしく盛大なもので、全く国として重要視されてきたことが極めてはっきりと判る。今後共、中国として重要視されていることも自ら察せられる。

第一日めは、中国人の院士と外国人院士の大会が人民大会堂で、周光召科学技術理事会主席、ビヨリックCAETS (国際工学アカデミー連合) 会長出席の下に徐匡迪中国工程院長の主導で行われた。

過去百年の中国工学の歴史を示す映画が上映され、歴代の毎年最高の業績を挙げたとして表彰された人々の紹介があった模様であり、また、2000年から昨年までに選ばれた外国人院士の紹介が行われた。日本からは藤嶋会員が出席された。

第二日めは、国際大会となっており、ほぼ前日と同じ式が行われた。主にグローバルな中国だけでなく世界的視野における将来問題が主題であった。講演題目のみを列記すると、

- ・ 経済成長のための創造の戦略
- ・ 我々の将来を持続する21世紀の工学アカデミー
- ・ 生物-社会-造物工学と人類の進歩

- ・ 持続可能なエネルギー供給のための挑戦と技術の可能性
 - ・ 農業の進歩のための重要科学技術
 - ・ 生態学と持続可能な発展
 - ・ 21世紀初頭におけるITの開発傾向について
- といった題目でスウェーデン、英国、米国から各一件、あとは海外より帰国した中国人を含めた中国人の講演で、SARS 防疫の教訓といった講演があったが、急に生々しく感じられた。何れにしても東洋の無視と壮大な構想に目を瞠る思いでこの十年の中国大躍進を見せられたという思いである。文革後、招聘一号として鉄路を歩いて香港から入国した国交開始前から中国発展のお手伝いをした、いわゆる古き友人たる筆者としては、いろいろな意味で感無量ということで、中国人の中に古き友人を見ることは出来なかったし、今後正常な交流を続けてゆくためには、国内での仕事の分担を重視した組織的展開を続けるべきである。特に今後、ようやく重要視されてきた創造技術の展開については、周囲が奪い取って創始者の研究推進を妨害するような現状を至急改めて、国全体として有効な発展を可能にするようにしなければならないと、しみじみと考えさせられた。

最終日4日午後には新設生化学研究所を見学し、投入された資金の豊かさに驚かされた。

2004年6月1日（火）、愛知厚生年金会館にて中部地区講演会が開かれた。



武田 邦彦会員

名古屋大学高等研究院の武田邦彦教授による「工学に明るい未来はあるか？－環境と生産から考える－」は大変衝撃的な講演であった。

18世紀の産業革命以来、工学は爆発的な進歩を遂げ、人類に大きな貢献をしてきた。たとえば、人類は工学の進歩によって「長寿」と「健康で文化的な生活」を手に入れることができた。しかし 20世紀後半から工学には暗雲がたれ込め、資源の枯渇、環境の汚染、そして人間機能を喪失される廃人現象が指摘され、これまで社会からもてはやされてきた工学は一変して非難的となり、工学はそれを受け止めきれず地球が温暖化すると言われて驚き、廃棄物貯蔵所が満杯になるという地方自治の責に着せられる問題にもあわてる。Rachel Carson や

Meadows の出現によって 180度転回した社会の評価に工学は事実を直視するという勇気すら抛棄したと氏は言う。

産業革命以来大量のエネルギーを使用する必要に迫られ、人類が地下資源をドライビングエネルギーにした時点で資源の枯渇化は当然の帰結であり、「自然を守る」ために DDT を排斥した結果、世界で8000万人に及ぶマラリアの犠牲者を出したと指摘する。

さらに欧米を中心とした世界の 1 / 5 の人口を持つ先進国が、残りの 4 / 5 を経済的に圧迫して資源を収奪することによって、近代工学の恩恵を受けている。

資源枯渇時代に最も大きな打撃を受ける我が国は、人口の減少を図り、工業技術を高め、教育に主力をおき、一人一人の資質と価値を上げて、来るべき時代に備えなければならない。いわゆる環境問題など非効率的非論理的課題に取り組んだり、まだ地下資源が存在し我が国の工学が優位にある今こそ、物質の再生産ではなく、人的精神的再投資（教育）に全力を投じることのみが解決策であると訴える。

講演後の会食においても出席した会員からの白熱した討論が続き、工学が直面する問題の大きさ、深刻さに全員が一致して認識を新たにしていた講演会であった。

日本工学アカデミーでは創立以来、その時々社会にとって重要な話題を採り上げて国際会議を開催してまいりましたが、2000年に開催した情報化社会についての会議INFO-21に続いて、ますますわれわれの身近になったロボットと人間が共生する社会をめぐる話題を採り上げた国際会議を10月4、5日の両日、東京の一橋記念講堂で開催致します。最先端のロボット技術とその応用についての展望と、先進各国の活動状況の紹介をそれぞれの専門家にお願いし

ていますので、ロボットをめぐるすべての課題を知るためには絶好の機会になると思います。このシンポジウムでの講演・討論を通じて、ロボット産業の将来も含めて、ロボットと共生する未来社会の課題について会員の皆様が専門家の方々と交えて議論していただくよう期待しております。

詳細は、既にご送付申し上げましたご案内状及び以下のEAJホームページをご参照下さい。

http://www.eaj.or.jp/openevent/symposium_robot/robots-symposium.html



この度、日本工学アカデミーの副会長を仰せつかり、身のひきしまる思いです。すでに1992年から三年間理事をつとめ、また現業から離れて久しいので、このようなことは夢にも思っていませんでした。総会後の懇親会で、もう引退したのではないかと冷やかされました。しかし、お引き受けしましたので、会長を支え、日本工学アカデミーの発展の為、わが国の科学技術の振興の為、力を尽くしたいと念じています。

日本工学アカデミーの創設は1987年です。当時はアメリカの日本バッシングが強烈で、むしろ受身で設立したという経緯があります。それからすでに17年、今では日本の民間アカデミー団体として存在感は揺るぎないものに向かっています。

現在会員は600名足らずですが、これを少なくとも1000名程度に、という願望があります。会員の候補者はたくさんおられます。会員になるよう勧めると、何のメリットがあるのかと言われます。果して、こうした学術団体にメリットを期待するのでしょうか。それよりも、学術団体を通じて日ごろの考えを開陳するとか、自らその団体に貢献するとか、そういうものではないでしょうか。その団体が輝かしい活動をし、魅力あるものであれば、会員になる人も増えてくると思われます。日本工学アカデミーがそのような魅力的な団体であってほしいと思います。

わが国の科学技術費は一時に比べ国の投資額がかなり増加し、基礎研究の成果が世界で評価されるようになったのは事実です。

一方、国民全体の科学技術レベルはどうでし

ょうか。先進諸国と比較して高いとは言えません。日頃の生活で、例えば食事とか、交通、エネルギー、環境といった事柄も科学技術を抜きにしては考えられません。専門的になりますと、宇宙とか医療、生命科学などの情報も飛び込んできます。私共はこうした情報を正確に理解しなくても過ごすことは出来ます。しかし一般に流布される情報が誤ったデータに基づいていたり、真実が歪曲されたり、一部分だけが誇張されたりしていることがあります。この結果、国民は科学技術に無関心になったり、誤った認識を持つことが多くなってきます。

これは、報道関係者に科学技術の専門家層が薄いことも一因と思われますが、科学技術に携わる人がそれを正しく伝えるつとめを怠っているようにも見えます。

かつて聞いた話ですが、学者が一般文芸書の類にものを執筆すると、専門の学会からボイコットされ、学者としてのレッテルを剥奪されてしまうということでした。それ程わが国の学術の世界は閉鎖的ということでしょう。しかし、こうした傾向にもめげず、国民に科学技術の芽を育て、正しい知識を伝達しようと懸命に努力している先生もおられます。そうした活動には、心から頭が下がります。

わが国全体の科学技術レベルの低さは、この学術の閉鎖性に由来しているところが大いのではないのでしょうか。

日本工学アカデミーは、そうした学術と社会、国民との間の「かけ橋」の役割を持ち、科学技術を正しく理解するように力を注ぐことが大切ではないかと思います。

「エンジニアリングと社会」、「技術リテラシー」作業部会の活動は、その方向として大変うれしく思っています。

会員の皆様も是非、「科学技術と社会」という視点に着目され、日本工学アカデミーとして検討すべき課題のご提案を頂き、会員の議論を経て、広く社会に提言していければよいと念じています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

広報委員会では、理事の皆様のご紹介を兼ねて、会員へのメッセージを「所感」、「抱負」という形で掲載させて頂くことにいたしました。毎号5名程度のご紹介を予定しております。尚、掲載順序は、原稿到着順となっております。



「理事就任に際して」

理事 伊東 諠
(東京工業大学名誉教授)

近未来の工学・技術は、“Liberal arts” engineering と Design under constraint の二極化の方向と言われている。前者は、名実ともに Multiple disciplinary、あるいは Trans-disciplinary な領域であり、本アカデミーの特徴的な様相を活かして、これまでも活発な活動がなされてきている。筆者の専門は生産技術であり、古くから表面的には後者の領域に属していると考えられているが、高度情報化・Localized globalization の社会が急速に進展している現今では、実態としては Multiple disciplinary、あるいは Trans-disciplinary な開発体制を益々要求される技術となっている。例えば、ガラス素材や光学の知識を要求される有機EL用の薄板ガラス部品や三次元液晶表示用Lenticularの超精密加工、あるいは社会科学、民族学などの知識を必要とする多民族協調の生産システムの設計や生産文化論が新しい話題である。そこで、専門深化でありながら異分野横断的な課題へ本アカデミーが活動を展開するお手伝いができればと考えている。



「EAJ理事に就任して」

理事 後藤 俊夫
(名古屋大学高等研究院長)

この度総会の承認を得て、2年間 EAJ 理事を務めることになりました。EAJは、日本の工学分野の指導的な経営者や研究者・技術者を擁する非常に権威ある組織であり、日本学術会議や外国のアカデミーとも連携して広がりのある活動を展開しています。従って、日本の科学技術や産業が転換期にあり、環境やエネルギー問題が深刻化している現在、EAJ の果たすべき役割は今まで以上に大きくなっていくのではないかと思います。私はまだ EAJ の諸活動に精通しているわけではありませんが、今後それらの活動の発展に少しでも貢献できるように努力していきたいと考えています。また、現在私は日本学術会議の第5部会員も務めていますので、両組織の間を繋ぐ役割も果たしていくべきであろうと思います。今後 EAJ 会員の皆様のご支援をいただければ幸いです。



「EAJ活動に思う」

理事 西原 英晃
(京都大学名誉教授)

機会をみつけて東京での談話サロンや関西での集まりに出席してきたが、地方在住の会員には工学アカデミーの全貌はなかなかわからない。EAJ NEWS や EAJ Information を丹念に読めば良いのだが、耳目の開き方が拙いためか、作業部会等の活動については余り情報が入ってこない。総会に出席して活動報告を聞かせて頂き、おぼろげながら全体の活動を掴むことができた。

理事という立場になってみると、これまでのように受身で、情報のレシービング・サイドにだけいる訳にはいなくなる。工学アカデミーから外部に対する発信は重要であるが、会の活動をより有意義にするためにはそれにも増して内部のコミュニケーションをより良くすることが重要であろう。関西では「地盤沈下」が問題になって久しい。もの造りに対するかつての求心力を回復するためにも、工学アカデミーの役割を考えてみたいと思う。



「所感」

理事 岩田 一明

(大阪大学・神戸大学名誉教授)

年々創出される知は分化と深化の度を加え、量的にも爆発的な増大が続いている。工学や技術の分野における、いわゆる工学知は、それらの多くの部分を担っている。これらの知の理解と価値判断の視点は複雑多様であり、一筋縄ではいかない。倫理観と恕と徳を内在させた専門家の支援なくしては、社会はそれら知の波及効果や恩恵をも享受出来ず、安心な生活の営みに支障さえ生じかねない。日本工学アカデミーは工学知に関する高度な経験を持つわが国の専門家集団とあってよいであろう。同時に工学知のみならず、他の領域や文化圏との間に知の架橋の役割を担える組織ともいえよう。「このような組織能力が社会に認知され、依縁される状態まで成熟しているか」となると地方に住まいする視点からは成熟過程と言う印象である。民産学官メディアなど、社会から真に認知される、あえていえば「工学知の灯台」の役割に微力ながら少しでも寄与できればと思う。



「材料の分野から考える」

理事 井形 直弘

(東京大学名誉教授)

近年材料科学の進歩は著しく、材料の範囲も金属・セラミックスから半導体・有機化合物・バイオマテリアルにまで及んでおり、夫々の分野において原子分子のレベルまで理解が進んでいる。まさにナノテクノロジーの時代である。従って材料の微細組織を制御して新しい機能性を創製することにより、新しい製品を生み出す事が可能になって来ている。産業のイノベーションの多くは材料及びそのシステムの革新から出発するといっても過言ではなかろう。我が国は幸い材料科学の面では進んでいるので、産業への応用に期待したい。

こうした材料の世界では縦方向の掘り下げだけでなく、横方向の見透しが必要になる。また材料を種々の製品に応用するには隣接分野との連携融合が必要である。これからの材料科学者は深い掘り下げを行なうI型人間ばかりでなく、横断的視野をもつT型人間あるいはΠ型人間が要求されるであろう。そのような人々の活躍により産学協力も進展し、基礎科学ばかりでなく、産業競争力にも強い国造りができるのではなかろうか。微力ながらこのような面で支援に尽くしたいと考える。



「光と闇の中で感じること」

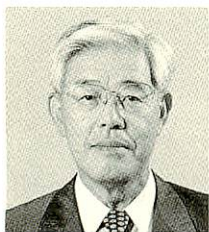
理事 秋山 守

((財) エネルギー総合工学研究所理事長)

最近、「アベラシオン」と題する小説の書評を眺めていたら次のような一文が目についた。曰く、人間が光と闇の交錯する存在である限りは、文明とは病であり、偏奇な逸脱であるという側面を決して捨象できない、云々。

関連して近頃頻に感じることは、正義や秩序や安心を望んで光を追い求める余り、＜闇はあつてはならず、あること無きが望ましく、－ここから一挙に飛躍するのだが－従って向かうべき社会には闇は存在しない＞とでも言うような風潮が、そこかしこに蔓延しているのではないか？との憶測ないしは危惧に近い想いである。

光と闇はおろか美醜・哀楽なども様々に織り交ざる複雑な現実を冷徹に直視しながら、それでいて尚も楽天的な夢を追う、心優しく強い若者に－望むらくはアカデミー活動の次元の中でも－今日も明日も明後日も、エヴリデイ逢って、温かい握手をしていきたいと願う毎日です。



「EAJ理事に就任しての所感」

理事 石丸 典生
(株)デンソー特別顧問

土地が狭く、天然資源に欠ける日本の将来は、知的産業の創出に懸かっており、国を挙げた「科学技術」を軸とした産学連携の活動が進められている。

16世紀に開花した科学の、産業への結実には五十年以上の年月を要し、科学と技術の隔たりは大きかった。しかし、今や科学による原理の発見からその成果としての産業への展開は、数年で完結する時である。まさに、科学と技術が一体化した「科学技術」時代といえる。その意味で、科学と技術はそれぞれ独立ではなく、学際の壁も殆ど消滅が進む現在、工学こそが産学連携の要といえる。わがEAJは日本産学界の英知の集積であり、単なる真理の追究に留まらず、産業界との緊密な連携のもと、来たるべき21世紀への文明進展の成果を期待されている。理事の一員としての責任の重大さを背に、日本のみでなく世界の未来のため、微力を尽くす所存である。



IEEE Jun-ichi Nishizawa Medal (ニシザワメダル)第1回授賞式

専務理事 山田 郁夫 / IKUO YAMADA



Arthur W. Winston IEEE 会長からメダルの銅製レプリカを受け取る西澤潤一会長



2002年に創設されたIEEE Jun-ichi Nishizawa Medal (ニシザワメダル)の第1回授賞式が6月19日に米国カンザスシティにて開催され、西澤潤一会長立ち会いの下に第1回ニシザワメダルが会長のもとから Hitachi Global Storage Technologies の Frederick H. Dill 博士に授与されました。

IEEE (Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc、米国の電気電子技術者協会、世界の175カ国に36万人の会員を擁する学会)には2000年に西澤会長ご自身が受賞されたエジソンメダルなど有名なメダルが15ありますが、材料・デバイス・光ファイバー・光通信などの分野の基礎研究から産業への顕著な貢献により、日本人として初めてニシザワメダルが創設されました。IEEEには37の技術分野毎の賞があり、日本人の名前がついた3つの賞がありま

したが、最高の賞である総会で与えられる20種類のメダルでは初めてです。IEEEのメダルにはスポンサーがつくことが多く、電気事業連合会と(財)半導体研究振興会がサポートしています。ニシザワメダルは西澤会長と同じ専門分野で貢献のあった方に贈呈されます。また、メダルには永久と十年限りのものと二種ありますが、ニシザワメダルは永久です。

ニシザワメダルの初の栄誉に浴されたのは半導体レーザーとゲルマニウムの高速ICをIBM研究所で開発された Frederick H. Dill 博士です。Dill 博士はフォトレジストの露光における「Dill パラメータ」が有名で、ビデオ RAM の発明や、ディスクメモリーのヘッドの大容量化などで顕著な業績を挙げられています。

Dill 博士は IEEE の電子デバイス部門の会長を務められ、CAD などを含む電子関係の最初のジャーナルの発行に貢献されました。

また、Dill 博士は1990年に米国工学アカデミーの電子工学部門の主査に就任されています。さらに、IBM の技術アカデミーの会長も務められ、2002年には IBM の Distinguished Engineer に昇進されました。IBM がディスク事業を日立に売却したので、現在 Hitachi Global Storage Technologies に移られています。

以上

今年も内閣府主催の産学官連携推進会議が京都で盛大に行われたことは大変喜ばしい。筆者は三菱重工㈱では初めての博士課程修了者で、ともすれば学部卒を会社で叩き上げた方が早いという風潮があった時代に、大学と企業の両方の強みと弱みをバイリンガルの的に実感し、かつお互いの強みを活かす意思の弱さにもどかしさを感じつつ、産業側に身を置いて30年余になる。この間、同時に米国の大学と産業との人的、技術的な連携の強さを、自主技術化への草創期であった原子力発電システム開発に従事して日米欧を行き来しながら痛感してきたキャリアから、現在の国を挙げての産学官連携強化の潮流には隔世の感を覚える。

おりしも、長い空白の10年といわれる、ある意味では“一億、総油断”の期間を経て、21世紀の日本の活路設計を固め、その実現に向けて産学官挙げての連携強化の潮流の中、筆者も時機到来との意気込みで、従来の個別共同研究型連携に加えて、全国の意気投合した大学長、総長と、全学組織を包含した包括連携協定を実現してきた。現在、北海道から九州まで学部、附属研究所も入れて7大学との新しい包括連携スキームを構築し、それぞれの大学の特色を活かした連携テーマを動かしつつあり、一企業のエゴは押さえてでも白紙に絵を描くフロンティア型の価値創造ものづくり立国実現へ、この包括連携スキームの成功例を出したいと意気込んでいるが、真の産学連携への次の心がけを実践している。

決して産の今日の問題を学に押し付けてはならない。同時に、学の保有する知的財産の技術のブローカーではいけない。21世紀の日本の活路を拓くため、共通の目標を持ってお互いの役割分担をし、日常の連携を強化したい。

何の目的の工学研究か時には相互干渉にも感じる交流をしたい。この思いに応えてくれる大学人も少なからずおられるのは、心強い。

一方、このような思いを持って一緒に連携の具体的な企画に入ろうとすると、産学連携への思いが各大学人ごとに異なっていることを痛感する。それは、あたかも国づくりに貢献したいと願う青年が、産学連携の熱い思いを共感してくれるのはこの人と感じ、結婚のプロポーズをしようと迫った時に、“そこまでは思っていないのよ”と身を離される思いをする場合がある。この思いのすれ違いに大変失望を感じつつ、一方ではこの結婚観（産学連携）への思いのギャップを埋めるための日常の連携活動が産学共に、まだまだ未熟であることを改めて痛感している。

特に、最も日本の国の行く末を憂え、産業人と共に21世紀の活路設計を共有するミッションを持つはずの有力大学の研究・教育現場とのギャップを強く感じる。恵まれた環境下、産学連携は精神的モットーで、産業側からの肉薄を疎ましいと受け取る風土があるような気がするの、筆者だけであらうか。

工学は文明（産業）づくりに役に立ってはじめてそのミッションを果たす。明治維新、戦後復興に次ぐ日本の活路を決める重大な局面にある今、21世紀の日本の活路とロードマップを産学官共に描き、その実現への役割分担をお互いにコミットする。そして、人と設備、資金も相乗りしつつ、当然基礎研究を担う学と、応用と実用という産の役割は、時間軸もリスクも違うことを相互理解しつつ、並行実行と相互点検、軌道修正を日常的に行う真の産学連携の文化を、一日も早く築きたい。

以上



藤井 澄二 会員
 東京大学名誉教授
 元富山県立大学学長
 2004年1月30日逝去 享年83

藤井澄二先生は、3年ほど入退院を繰り返された後、本年1月30日急性心不全のため亡くなりました。先生の生前のご功績お人柄を忍び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生は昭和17年9月東京帝国大学工学部機械工学科を繰り上げ卒業後第二陸軍航空技術研究所勤務、その後昭和20年東大航空研究所嘱託、昭和22年同工学部助教授、昭和24年工学博士、

昭和31年同教授（工学部）となられ、機械工学、特に機械振動学、車両工学、自動制御学、ロボット工学等の分野で多大の業績を上げられました。昭和56年4月同大学を定年退職、名誉教授となられましたが、その間同大学では評議員、工学部長、総長特別補佐等の要職を務められました。同大学退職後は東京電機大学教授、同理工学部長、また平成2年から平成9年まで富山県立大学の初代学長を務められました。日本機械学会、日本ロボット学会等多くの学会の会長も歴任されました。これらの功績により、紫綬褒章、勲二等瑞宝章を受けておられます。

（堀 幸夫）

EAJ NEWS 100号記念特集号（予告）

1987年8月1日にNo.1（創刊号）を発刊してから、本 EAJ NEWS も次号で100号を迎えることになりました。そこで、特集記事として、会長挨拶、回顧録、座談会等を予定しております。座談会にはアカデミー設立準備段階からご活躍の方から最近ご入会の方まで5名の会員にご出席いただき、設立までの秘話、日本工学アカデミー発足時の社会的背景、使命達成のための諸活動を振り返り、将来の期待を語っていただきました。どうぞご期待ください。

日本学術会議第5部会員との懇談会

日時：2004年10月26日（火）18：00－20：00
 場所：はあといん乃木坂 6F それいゆ

公開シンポジウム（主催）

「九州地区の21世紀COEが育む環境技術」
 日時：2004年10月27日（水）13：10－17：00
 場所：西日本総合展示場新館

公開シンポジウム（主催）

「日本のエネルギーに未来はあるか」
 ー有限の地球に生きるー
 日時：2004年11月1日（月）10：00－17：00
 場所：日本学術会議講堂

編集後記

小林敏雄委員長のもと、新たに広報委員を務めることになりました。よろしくお願い申し上げます。日本工学アカデミーでは、これまでセミナーやシンポジウムへの参加が主体の、どちらかというと受身的会員でしたが、その折でもEAJ NEWSだけはよく読んでおりました。私のような会員も多いと思われるので、参加活性化のためにも、この広報活動は大切であると考えています。

工学は科学と技術を結ぶ大きな架橋思想体

系と考えています。科学・学術は本来、公のもの、それから出てくる技術は本来、知的権利を伴うものと考えられます。独立法人化で変わりゆく（国立）大学を考えると、学会は学術討論のみならず、技術のPR、交流の場の役割をもっと強く担うことになるでしょう。こうした動きの中、アカデミアや企業の間で、日本工学アカデミーの指導的役割は今後ますます大きくなるものと考えています。

（伊藤 叡）